中堅・ベンチャー 地域経済

関西発 元気の素 よしだが行く!

伝えたい「サインの文化」

第一工芸 綿谷 賢治社長

第一工芸さんは綿谷社長のお父さんが昭和三十一年に大阪・阿倍野で創業されました。綿谷社長いわく「おやじは人間が好きというのか、誰とでもすぐに友達になりますねん。それだけなら良いんやけど、いつも家に連れて帰ってきます。当時の職人もみんなおやじが連れてきた人たちです。つまり、面倒見のいい親方ですわ」とのこと。

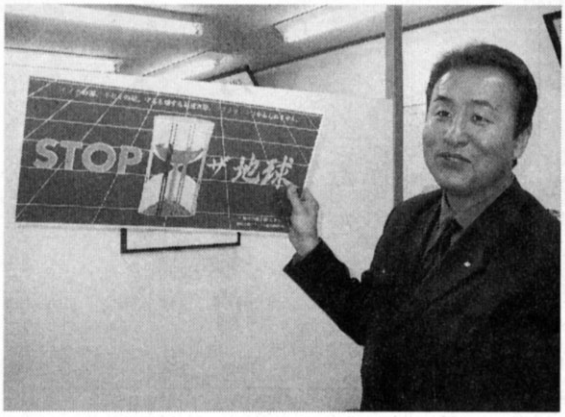
綿谷社長は、事業はお兄さんが継ぐものと思い、高校を卒業すると自分で就職を決めてさっさと家を出はります。その後、お兄さんも大学を卒業されてテレビ局に就職しはりました。

綿谷社長が社会人になって二年目に当時の番頭さん(現・岸田専務)が「会社に帰ってきておやじさんを助けてほしい」と言ってきはりました。お父さんが入院しはったのです。

考えた末に綿谷社長は事業を継ぐ決心をしはります。帰ってしばらくするとお父さんは退院しはりましたが、あまり体調がよくなかったようです。

当時の第一工芸は創業社長であるおやじさんでもってる会社でした。得意先も銀行も仕入れ先も、そして何より社員たちのがんばりはおやじさんの力でした。おやじさんの体調不良のことは社内の幹部の一握りの人間以外は秘密でした。座ってなくてもそこにおやじさんの机があるだけで、社員たちは安心します。

「僕は自分が決裁したことでも、おやじが決定を下したって説明していました。それだけ偉大で影響力のある人やったんです」と綿谷社長。



第一工芸は昔でいう看板屋さん。でも、今はいろんな施設や場所で使われるサイン・ディスプレーの企画・制作・施工のトータルソリューションの会社です。看板の枠を超えて、媒体広告や施設の案内表示からテーマパークのショーイベント、博物館や科学館の展示物の演出まで幅広く事業を展開しておられます。

看板も広告業界の一員ですから業界のトップは代理店です。でも、綿谷社長は代理店になりたいとは思っておられないようです。代理店にできないことがやりたいとのことでした。

綿谷社長にとって、第一工芸の社員にとって一つ一つのサインは商品ではありません。みんなの作品なんです。この作品作りを通して一人一人のお客さまにサインの文化をお伝えして、「目立ったらいい」から「そこに求められるサイン」を提案する会社であり続けたいとの強い思いを持っておられます。

看板は町の文化ですよね。そうそう、大阪ドームがオープンの時に大半の看板にかかわられたんですよね。その機動力が強みと言っておられました。

大阪では看板といえば第一工芸とのこと。これからも最強の技術集団をグイグイ引っ張っていってください。

第一工芸 電照広告をはじめ、展示会・ディスプレー・商業施設など広告制作に関して、絶えざる研究と作品制作に寄せる熱い情熱、総合的な技術体制で、顧客の希望に応える。大阪市阿倍野区阪南町1の24の30。(http://www.daiichikohgei.co.jp)